

成瀬悟策先生を偲んで

長谷川明弘

(日本催眠医学心理学会常任理事・東洋英和女学院大学)

成瀬悟策先生が 2019 年 8 月 3 日にご逝去なさったという訃報を知ったのはその日から数日後でした。2019 年 6 月末が成瀬先生のお姿を拝見した最後となってしまいました。臨床動作法の資格者限定の研修会における講義の冒頭で、催眠と動作法の関係について「最近、動作法に暗示を使っていることに気づき、トランスを用いることもある。ここで話すのは長くなるので又の機会にしたい」とおっしゃり、秋の研修会のおりに伺えると期待しておりました。成瀬先生は、これまでのやり方や考えを常に見つめ直して「そう教えていたかなあ。今はこうするのが良いと思う」と新たな方法を模索されては披露なさる姿勢を貫かれていました。

思い起こせば、成瀬先生のお名前を存じ上げたのは今から 30 年前の学部 1 年の頃に催眠を学び始めた頃でした。当時、大学で助手をされていた本学会員の方が名古屋市東山動物園にできて間もない頃のスカイタワーで成瀬先生に遭遇されたと催眠誘導指導の合間に話題になされたことを覚えております。学部 1 年の終わり頃にミルトン・エリクソンの催眠や家族療法(ブリーフセラピー)を学ぶ研修会の講師としていらした本学会で理事長を務められた宮田敬一先生との邂逅がございました。後に宮田先生の恩師が成瀬悟策先生であることを知りました。大学卒業後に宮田先生からは新潟大学大学院にてご指導を頂きました。私からすれば、恩師である宮田先生のさらなる恩師である成瀬先生は特別な存在でした。

初めて成瀬先生のお姿を拝見したのは、大学 4 年の時でした。大学院の進学予定先である新潟で開催された宮田先生が大会長を務められた本学会の大会シンポジウムにてフロアから拳手をされて活発な議論を登壇者に投げかけておられるご年配の方がいらっしゃいました。遠巻きでしたので、どのような方かは知るよしもありませんでした。大会閉会後に、宮田先生に先ほどの方はどなたかと伺うと「あれが成瀬先生だよ」と言われました。「(学生の頃は成瀬先生のこと)とても怖かったよ」と宮田先生はおっしゃいました。あの方が催眠の世界で牽引なさってこられた成瀬悟策先生なのかと感銘を覚えました。その後 2000 年を挟んだ数年間の大型連休の時期に、成瀬先生とは盟友と呼べるような間柄で 2019 年 8 月末に逝去された河野良和先生との「臨床催眠スクール」という研修会が宿泊形式で開催され、お二人から催眠を学ぼうと全国各地から人が東京へ集っていました。私もその参加者の一人で新潟から参加しました。成瀬先生達が催眠のお考えをお示しにされたり、成瀬先生が最近思いついたといわれた動作法的な催眠誘導の実演をなさったりして、刺激的でかつ密度の濃い研修内容でした。いつの時やらに宮田先生から「長谷川くんは、人懐っこいから言うておくけど、成瀬先生にはあまり親しく話しかけるなよ。どんな指導をしているのかと私が怒られるのが怖いから」との忠告を思い出しながら成瀬先生とは何度もお話しさせていただく機会がありました。しかし恩師の忠告をどこか守ろうと一定の距離を置きながら、できる限り近くに居るようにしておりました。成瀬先生からすれば孫弟子に相当するであろう私は、とてもやさしい方という記憶が多い一方で、端々に伺える厳格さを感じておりました。宮田先生をはじめ直接学んだ門下生や弟子と言われる方達から伺う成瀬先生のエピソードは、「鋭くて、怖くて、厳しい」という話しでした。印象に残っているのは、新潟へ教えに来られた成瀬先生を迎えに伺った宮田先生のタクシ

一で着座位置のマナーをご指摘なさり、門下生の中で成瀬先生と宮田先生のそれぞれの人となりを表す面白エピソードとして話題になっていたと伺っております。

弟子との間では「成瀬先生」という呼称ではなく「成瀬さん」と呼んでもらう雰囲気をお好んでおられたようです。真実を追究する仲間なので先生ではないと考えておられたと思われました。開発された心理リハビリテーションや臨床動作法の呼称も「成瀬法」はどうかという話しに、それでは普及しないと反対されたこと伺っております。

催眠に限らず、動作法でも合宿形式行われることの多かった研修会では、朝食の早い時間に食堂で成瀬先生とお話をする機会に恵まれることが多かったです。ある時は、朝の散歩から戻ってこられた成瀬先生のお近くに席を移してお話を伺いました。ミルトン・エリクソンとの交流の話では、戦後に貴重な文献をまとめて送付してきてそれを仲間と読んだことや、エリクソンの奥様が魅力的で素敵であったエピソード、成瀬先生自身の実践してきたことがエリクソンからも大きく影響を受けていたと振り返ってみて気づいたということをお伺いしました。事象を実験で検証するなど科学的に臨む姿勢、臨床実践では可能な限り短く、あまり負担を掛けない関わりをして「治す」という矜持で臨んでいるということをお話されました。また 2010 年代半ばの心理職国家資格化の渦中の頃に伺った時は、国家資格化を念願において、いろいろな会議で働きかけた時期がおありであったこと、日本臨床心理学会の紛糾から日本心理臨床学会の発足そして創設までの道のり、その頃に国家資格化へ反対されていたある方が大病をされて、お見舞いの電話をされたおりに、『河合くん(河合隼雄先生のこと)がこっちへ来いと呼んでいるのではないかと話したよ』とご心配なさっておられることと合わせて、茶目っ気たっぷりにお話しになりました。また臨床心理士認定番号が 1 番の理由を伺うと「私が年長であったからだろうね」と柔らかにお話しなされたことを思い出します。

数年前に勤務先の同僚を中心に臨床動作法やブリーフセラピーなどを取り上げて編纂した叢書が出来上がり、成瀬先生へ刊行の度にお届けいたしました。すると即座に達筆な文字で書かれたお葉書を頂き「いっそうのご精進を期待いたします」「これからのご発展を期待しております」との言葉に励まされました。

本特集号に掲載されている論文を拝読いたしましても、実験と実践(基礎と応用)研究を多く行われ、分野や領域も多岐にわたっていることが伺えます。基礎と応用という区分が難しいと思うほどでした。特に催眠の大きな特徴ともいえる実験、調査、そして臨床実践といった基礎から応用までを包括した研究成果を発表され、証拠に基づいた(evidence based)姿勢を一貫して半世紀以上前から当然のようになさってこられたことに驚きを隠せません。人そのものに向かう好奇心と興味を追求する上で催眠を介して体現なさってこられたことを改めて気づかされました。

成瀬先生は、催眠に限らず臨床動作法を開発されるなど臨床心理学の業界を長らく牽引され、精力的にご指導をなさって多くの方に影響を与えられました。私は影響を受けた 1 人として、また催眠や動作法について直接ご指導を受け、そしてブリーフの哲学や姿勢を学んだ 1 人として、これからも臨床実践の腕前を磨きながら、臨床心理学の真理を追究するように努力していきたいと思っています。

成瀬先生 ありがとうございます。